

はじめに

移民や女性、身体障害者、イスラム教徒らへの侮蔑的な言動を繰り返してきた実業家ドナルド・トランプ（70）が、世界中の大方の予測を覆して、アメリカの第45代大統領に選ばれた。

選挙期間を通じて、日本の多くの人々は「なぜトランプがこんなに強いのか？」と首をかしげていたことだろう。

それはニューヨーク駐在記者の私も同じだった。2015と2016年のアメリカ大統領選の取材は、わからないことの連続。正直な感想だ。

これらの問いへの答えは、ニューヨークなど大都市で取材してもまったく見えなかった。例えば、ニューヨーク・ブロンクスのバーで開かれた、候補者討論会の観戦パーティー。当時は人気トップだったトランプについて、支持する人と支持しない人の双方を取材しようとしたが、支持者はついに1人も見つけられなかった。トランプを毛嫌いしたり、笑いものにしたりする人ばかり。トランプが発言するたびにバーに失笑が漏れていた。首都ワシントンの同僚も、トランプ支持者を取材しようにも近場ではなかなか見つけられない、と苦労していた。

選挙が終わった今となれば、これも納得だ。本選でのトランプの得票率は、ニューヨーク・

マンハッタンで10%、同ブルッククスで9・6%、同ブルックリンで17・9%。首都ワシントンでは4・1%。西海岸の大都市も同じようなものだ。サンフランシスコ郡で9・4%、ロサンゼルス郡で23・4%。結果論だが、こんなに少なければ見つけるのに苦労したのも当然だろう。

都市部はトランプを拒絶したのだ。

しかし、全米地図を広げれば、共和党の候補者を1人に絞り込む予備選でトランプが圧倒的な勝利を収めた街「トランプ王国」がいくつもあった。多くは地方だ。「ここに行けば、答えが見えるのかもしれない」。私は、今回の大統領選の最大の疑問の答えを求めて、2015年12月から、そうした街々に通い始めた。山あいのバー、ダイナー（食堂）、床屋、時には自宅に上がり込んで、トランプの支持者の思いに耳を傾けた。

オバマの「チェンジ」に期待した元民主党支持者、失業中の人、薬物の蔓延に怯える人、複数の仕事をかけもちする人、まじめに働いても暮らしが一向に楽にならないことに不安を覚える人。多くは、明日の暮らしや子どもの将来を心配する、勤勉なアメリカ人だった。そこには普段の取材では見えない、見ていない、もう一つのアメリカ、「トランプ王国」が広がっていたのだ。

1年に及んだ取材メモを整理すると、「トランプ王国」以外の土地も含め、計14州で取材し

ていた。私たち日本人が接することの多い、ニューヨークや首都ワシントン、ロサンゼルス、サンフランシスコなどの大都市とは異なる、格好良くもないアメリカの記録。本書では、日本人記者が見た、「もう一つのアメリカ」を報告したい。

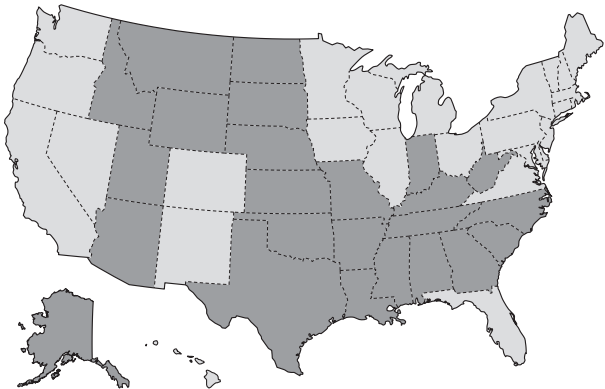
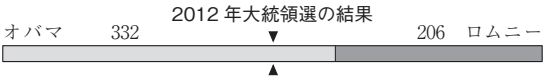
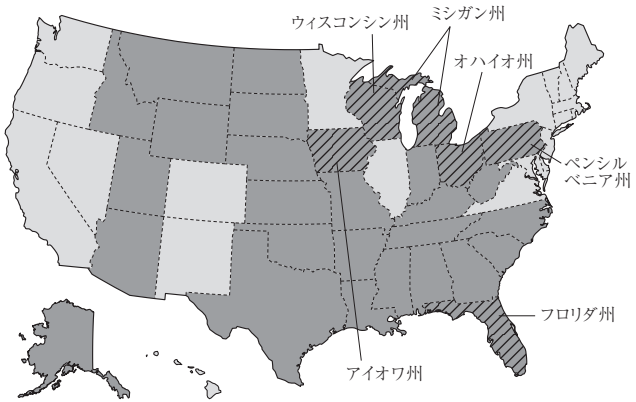
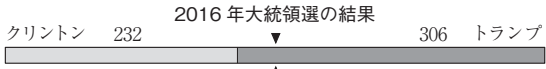
本書の構成の説明に入る前に、2枚の全米地図を見比べてみよう。

2016年大統領選と前回2012年の選挙結果を示した2枚だ。前回の共和党候補(ミット・ロムニー)が負けて、今回トランプが勝った州は6つある。具体的には、オハイオ、ペンシルベニア、ウイスコンシン、ミシガン、アイオワ、フロリダの6州だ。

この6州のうち、5州には共通点がある。

フロリダ以外の5州は、五大湖周辺の通称「ラストベルト(Rust Belt、さびついた工業地帯)」と呼ばれるエリアに、全体もしくは部分的に含まれるのだ。従来型の製鉄業や製造業が栄え、高卒のブルーカラー労働者たちがまつとうな給料を稼ぎ、分厚いミドルクラス(中流階級)を形成していたエリアだ。重厚長大産業の集積地で、「オールド・エコノミー」の現場とも言える。ラスト(Rust)とは金属さびの意味。

ラストベルトの労働者たちは、一般的に労働組合に属し、民主党を支持する傾向が強かった。彼らに「そもそもなぜ民主党支持だったのか？」と質問しても、「そんなこと考えたこともな



* 数字は選挙人の獲得数

い」「この街で生まれ育てば、みんな民主党支持だった」などと答える。

一帯は、民主党カラーが青のため「ブルー・ステーツ（青い州）」と呼ばれることが多かった。トランプは、これらの青い州を、共和党カラーの赤色に染め上げた。トランプは、専門家の予測を覆し、ラストベルト諸州で連勝したことで第45代大統領の座をつかんだ。

ここが2016年アメリカ大統領選の震源地（地図の斜線部分）だ。

この「ラストベルト」（オハイオ州周辺）での取材を、私は投票日の1年ほど前、2015年12月に始めていた。第1章ではラストベルトの街々で起きた「異変」を地元の共和党委員長の視点から描いた上で、この異変を起こした労働者の思いや暮らしぶりも伝える。第2章ではラストベルトを象徴する街、ヤングスタウンの人々の声を紹介する。第3章ではラストベルトの若者（気持ち若い人も）に焦点を当て、第4章では「ミドルクラスから没落する」との不安を抱くラストベルト内外の人々を描く。第5章では、貧困の代名詞のように言われてきたアパラチア地方の山あいの街を訪ねる。最近では共和党が強く、接戦にもならないためメディアの注目を集めなかったが、トランプが圧勝した土地だ。

第6章では、もう一つの旋風を巻き起こした、自称「民主社会主義者」バーニー・サンダース上院議員（74）の運動と、その支持者を紹介する。今回の大統領選のキーワードである「反エ

スタブリッシュメント(既得権層)の風潮を伝えるには、共和党だけでなく、民主党の側で起きた旋風の紹介にも意味があると思う。

第7章では、現場取材を踏まえた考察を行った。社会部で教育や労働をテーマに取材してきた私にとって、ラストベルトの人々の悩みは、日本の人々の悩みと陸続きに見えた。グローバル化する世界での、先進国のミドルクラスという意味で共通点がある。トランプ大統領を誕生させた支持者たちは、決して私たちに理解できない他人ではない。

この1年間の取材記録の報告を始めたい。

*敬称略。登場人物の年齢や肩書は原則取材時のままとした。写真はいずれも筆者が撮影した(提供朝日新聞社)。

*登場人物にはプライバシー保護のために苗字を抜き、名前だけで表記した場合もある。

*本書で「白人」という場合、「ヒスパニックとラテン系を除く白人」のデータを使用した。

*原則1ドル＝115円で換算。丸めたところもある。

目次

はじめに

記者が歩いた「トランプ王国」 x

プロローグ——本命はトランプ 1

トランプ番記者の予言／トランプらしさ全開／サイレント・マジヨリテイ
ーが吐き出す不満／「王国」を追う

第1章 「前代未聞」が起きた労働者の街 …………… 17

ラストベルトの共和党委員長の証言・予備選直後／陣営の想像を超えた集
客力／隠れ支持者／にじむ期待感／逆転勝利／ラストベルトのど真ん中を
歩いてきた労働者の決断／人間は仕事がなきゃ幸せになれない／ミドルク
ラスの豊かな暮らし／62歳まで何とか生き残ったぞ／ブルー・ドッグの反逆

第2章 オレも、やっぱりトランプにしたよ …………… 47

スプリングステイーンの歌った街／ヤングスタウンのダイナーで／やつぱ
りトランプに投票したよ／地元保安官の解説／涙目で語る「真のヒーロ
ー」／トラフィカントとトランプ／真昼のバーで政治談義

第3章 地方で暮らす若者たち

今朝、親友が死んだ／中年の白人の死亡率上昇／無関心層からリーダー格へ
／身の上話／デイナを立ち直らせた演説／華やかな党大会／独り者だからや
つていける／スポンサーの口ゴ入りスーツ／たまたまさびれた街に生まれただ
けだ／成長の見込みのない仕事／1期4年だけ、任せてみたい／旅の話に
夢中になる男／42歳で初めて無保険に／8カ月間で142社に落ちた／ニユ
ーヨークは最高の街よね

71

第4章 没落するミドルクラス

「嘆かわしい」事件／「トランプ党」の支持者／組合員も登壇／私、組み立て
ラインが分解されるのを見ました／「ところで」と工場移転を通告された／政
治エリートへの不信／トランプ不在でも盛り上がる会場／広がる不満／派手
な演出／建設作業員の「寄せ場」／クラクシオンで支持表明／空っぽの冷蔵庫
／夢は学費を返済すること

107

第5章 「時代遅れ」と笑われて

炭鉱の街／「アパラチアの貧困」の代名詞にされて／置き去りにされた人々／
貧困率4割／アメリカなのに新車を売っていない街／炭鉱復活「トランプが
やってくれる」／炭鉱が戻れば、カネが回る／煙もくもく、溶鉱炉の壁画／あ
なたりべラルなの！／聞き心地のよい演説／多様性を憂う声／高齢白人に増
える共和党支持／床屋談義はトランプ絶賛／アパラチアを制覇したトランプ

143

／9歳で初めて黒人を見た

第6章 もう一つの大旋風 ……………

5分の出馬会見／地元紙編集長の思い／いつも機嫌が悪い、おじいさん／見込みのない候補／支持者の声／21世紀のフランクリン・ルースベルトだ

185

第7章 アメリカン・ドリームの終焉 ……………

【A】なぜ、トランプ？ ついえたアメリカン・ドリーム／親の所得を超えられるアメリカ人は半分／もはやミドルクラスではない／広がる格差／わかりやすい標的／トランプの強さ／選挙戦は顧客サービス？ 【B】トランプ勝利が突き付けるもの 敵意を動員したトランプ／少数派の声の行方／事実が重視されない風潮／人気が落ちた時どうなる？／グローバル化との向き合い方／ブルーカラー労働者の代弁は可能か？／本場の課題？／スキルギャップ／グローバル化の勝者と敗者／ポピュリズムの背景／悲観的な予測／反省から何が生まれる？

207

エピソード——大陸の真ん中の勝利 255

おわりに 259

目次
〔付録〕CNN出口調査の結果(抄録)

記者が歩いた「トランプ王国」

2015年11月～2016年11月

☐=人口(人) ☑=失業率(%) ☒=家計所得の中央値(\$)

☓=貧困率(%) ☔=白人比率(%、ヒスパニックとラテン系を除く)

☕=25歳以上に占める大卒以上の割合(%)

予備選=共和党予備選・党員集会結果(%) 本選=本選結果(%)

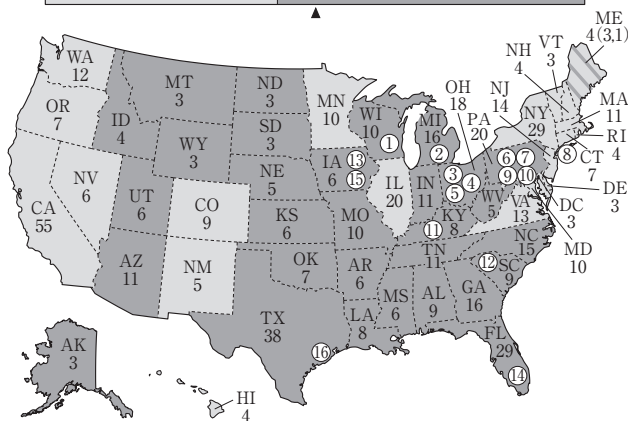
* 予備選の結果は1位と2位のみ。得票率は政治ニュースサイト「ポリティコ」より。

* 下線部は、市町村単位のデータがなく、その市町村を含む郡の数値を使用したものを示す。

全米(2016年大統領選)

☐321,418,820 ☑4.9 ☒\$53,889 ☓13.5 ☔61.6 ☕29.8

クリントン 232 ▼ 306 トランプ ▲



①ワウサウ(ウィスコンシン州)

②ノバイ(ミシガン州)

③ウオーレン(オハイオ州トランプル郡)

☐40,245 ☑6.0 ☒\$29,376 ☓35.0 ☔66.6 ☕11.8

予備選 トランプ 52.6 / ケーシック 34.1

本選 トランプ 51.2 / クリントン 44.8

- ④ ジラード (オハイオ州トランブル郡)
 人 9,599 因 6.0 金 38,771 資 18.5 自 91.8 因 19.2
 予備選 トランプ 52.6 / ケーシック 34.1
 本選 トランプ 51.2 / クリントン 44.8
- ⑤ ヤングスタウン (オハイオ州マホニング郡)
 人 64,628 因 5.8 金 24,133 資 38.3 自 43.2 因 11.7
 予備選 トランプ 50.6 / ケーシック 37.4
 本選 クリントン 49.8 / トランプ 46.8
- ⑥ グリーンビル (ペンシルベニア州)
- ⑦ モネッセン (ペンシルベニア州ウエストモアランド郡)
 人 7,483 因 5.6 金 35,447 資 17.8 自 79.6 因 16.3
 予備選 トランプ 62.1 / クルーズ 20.2
 本選 トランプ 64.1 / クリントン 32.7
- ⑧ サウサンプトン (ニューヨーク州サフォーク郡)
 人 58,254 因 4.2 金 79,799 資 8.1 自 72.5 因 37.5
 予備選 トランプ 72.5 / ケーシック 18.5
 本選 トランプ 52.5 / クリントン 44.3
- ⑨ シャロン (ペンシルベニア州マーサー郡)
 人 13,562 因 6.0 金 30,720 資 24.5 自 79.6 因 19.0
 予備選 トランプ 55.4 / ケーシック 22.2
 本選 トランプ 60.6 / クリントン 35.6
- ⑩ コネルズビル (ペンシルベニア州ファイエット郡)
 人 7,515 因 7.5 金 29,560 資 27.3 自 92.7 因 12.7
 予備選 トランプ 69.7 / クルーズ 18.1
 本選 トランプ 64.4 / クリントン 33.4
- ⑪ アイネズ (ケンタッキー州マーティン郡)
 人 約 700 因 8.0 金 25,795 資 40.6 自 88.3 因 6.5
 予備選 トランプ 60.1 / クルーズ 20.5
 本選 トランプ 88.6 / クリントン 9.2
- ⑫ ポーリーズアイランド (サウスカロライナ州)
- ⑬ シダーラピッズ (アイオワ州)
- ⑭ ポカラトン (フロリダ州パームビーチ郡)
 人 93,235 因 5.1 金 70,638 資 10.0 自 79.1 因 52.3
 予備選 トランプ 52.1 / ルビオ 24.3
 本選 クリントン 56.5 / トランプ 41.2
- ⑮ ウォータールー (アイオワ州)
- ⑯ ボーモント (テキサス州)

プロローグ——本命はトランプ



「アメリカを救おう，トランプに投票しよう」と書かれた元民主党員が作った看板(オハイオ州)

トランプ番記者の予言

初めてトランプの集会を現地取材したのは、2015年11月14日のテキサス州ボーモン
(Beaumont)だった。翌年11月の投開票日まで、ちょうど1年という時期だった。

せつかく朝5時の便でニューヨークから飛び立ったのに、機材トラブルに見舞われ、大幅に遅れて到着した。予定では、トランプの演説が始まった頃だった。急がないと、ここまでやって来た意味がなくなる。

私は飛行機から走って飛び出した。すると同じような乗客が、もう1人いた。

アメリカの大手メディアのトランプ番記者だった。大手メディアは各候補者の動向を大統領選の1年以上前から追いかけている。その1人が同じ便に乗っていた。

お互いにリュック1つで身軽な格好。なんとなく同業者というのがわかる。向こうから声を掛けてくれた。

「見ない顔だな、トランプ集会に行くのか？」

「はい、初のトランプ集会です。タクシーを捕まえて会場に行きます」

「こんな田舎の空港でタクシーが待機しているわけないだろ、呼んだって、なかなか来ない

ぞ」

こんな会話を空港の出口をめざして走りながらかわした。

「実はまだアメリカの運転免許証もなく、レンタカーできないんです」

「じゃあ、乗せてやる、ついてこい！」

言葉遣いは少々荒いが、親切な記者だった。

ハンドルを握ったら、運転はもつと荒かった。テキサス州の農道。どんなに飛ばしてもぶつかるものはほとんどない。それでもちよつと怖い。

上空をヘリコプターが横切った。「トランプ(関係者)のヘリだ。集会の開始も遅れているぞ、飛ばせば間に合う！」

候補者の日々の動向を追いかける番記者ともなると、ヘリの見分けもつくらしい。明らかにテンションが上がっており、さらにアクセルを踏み込む。

ハンドルを握る番記者が聞いてくる。「なんで日本の記者がトランプの集会に来るんだ？」
「やけにアメリカで人気があるので、今のうちに見ておこうと思って」

トランプは当初、17人が乱立した共和党予備選の中で支持率トップだった。2015年7月に首位に躍り出で以降、そのポジションをほぼ維持していた。

「で、トランプ、正直どう思う？」。番記者が聞いてくるので、正直に答えた。

「発言がめちやくちやで、見ている分にはおもしろい。でもアメリカの識者やメディアが指摘するように、年内には人気が陰つて選挙戦から脱落すると思う」

そんなホンネを言ったら、番記者に笑われた。

「キミはホントに何もわかつていないなあ」

ここから助言が始まった。これがすべて当たっていたのだから、今となっては感謝するばかりだ。

「トランプが遊説する場所を地図に落としてみたことあるか？　ないだろ？」

確かにない。凶星だ。

「遊説先は、ほとんど田舎だ。仮に都会の近くでも、集会場所は郊外。彼は地方をしつかり回っている。自分の訴えが、どこの人々に響くのかを理解している証拠だ。大都会、特に首都ワシントンや、キミが住んでいるニューヨークへの反発心が強い街だ」

番記者はあくセルを踏み込みながら続けた。

「ここでハッキリ言おう。トランプが共和党の候補になる。来年の党大会前には決まるだろう。なんでそう言えるかわかるか？　集会の規模が違ふ、支持者の熱気も違ふ。他の候補者の

集会とは比較にならない。キミはどの候補が有力だと思う？」

私は、キューバ系の若手候補、上院議員のマルコ・ルビオ(44)の名前を挙げた。マイノリティーが増えて、一層の多様化が進むアメリカ社会において、貧しいキューバ移民の息子が大統領選をめざすという「アメリカン・ドリーム」を絵にかいたようなルビオの物語は、社会に歓迎されるだろう。そう理由を説明した。

すると番記者は「ルビオも悪くない候補者だ。他にも有力な候補者はいるが、彼らの集会はトランプとは比較にならないほど規模が小さい。トランプの集会には、これまで選挙なんかに興味を持っていなかった人々も大勢きている。今日の集会で、キミはびっくりするぞ」

この日の会場「フォード・パーク・アリーナ」にやっと到着した。広大な駐車場だが、支持者の車でほとんど埋まっている。番記者は車を駐車場の端に止めた。

「早く出ろ、カギを閉めるぞ、じゃあな、またどこかで会おう」

番記者は、そう言うのと会場に向かって走り出した。私も必死に追いかけた。

トランプらしき全開

入口では、厳重な警備が実施されていた。一眼レフのカメラも、本物のカメラか否かを確認するために「床に向かってシャッターを切れ」と指示された。カメラを装った銃を警戒してい

るのだという。

荷物チェックを終えて、会場に入ると、トランプの演説は中盤に差し掛かっていた。広い会場とあつて満席ではないものの、すごい熱気だった。一般席に座り、写真を撮った。まず、中央の演台にいるトランプを撮影し、次に酔いしれる支持者にもカメラを向けた。

ほとんど白人だった。

人口統計によると、ボーマントでは、白人(約35%)より黒人(約47%)の方が多い。だが見渡す限り、会場に黒人やヒスパニックなどのマイノリティーの姿はほとんど見当たらなかった。

トランプの演説は、テレビで見るよりも迫力があつた。会場の雰囲気がそう思わせるのだから。

「私が子どもの頃、アメリカは負けたことなんてなかったぞ。今は戦争でも何でも勝てやしない、負けてばかりだ。(過激派組織)「イスラム国(IS)」を倒すこともできないじゃないか。私なら勝ちますよ。信じてください。時間もかけませんよ、なぜならすぐに戻ってきて、この国を再建しないといけないからですよ」

世界が対処に苦悩している過激派の問題を、時間もかけずに解決すると言い切っていた。「信じてください」を当時から多用していたが、普通に考えれば、信じられるわけがない。



テキサス州ボーモントでのトランプ集会は、大半の支持者が白人だった

それでも、身振りが大きく、ラフな言葉遣いの演説に支持者は聞き入り、笑い、歓喜に沸く。使っている英語も簡単だ。なるほど「小学生レベルの英語」と言われている通りだ。

「私はとてもいい人です。私のことを嫌いな人まで、私を支持するんです。私が本当に有能だからです。私は賢くて、信じられないほどステキな企業を育ててきました」

「テレビを見ると、私は世論調査で首位だというのに、「いつたいいいつになつたらトランプはレースを降りるんでしようかね」なんて言っているヤツがいる。まったく。私は絶対に離脱なんてしませんよ。皆さん！ 私たちは勝つんです！」

トランプらしさは全開だった。

自分のことを「天才」「本当に頭がいい」「いい人」と真顔で繰り返すが、多くの人は「またトランプが言っている」と軽く受け流し、不思議なぐらいにイヤミになつていない。これは彼の最大の武器の1つだ。政治家としては、イヤミにならないことは強い。



支持者のプラカード。「サイレント・マジョリティー(声なき多数派)はトランプを支持する」

そして自分のことを批判する著名人を徹底的にけなす。この日のターゲットは、保守派に影響力があるコラムニスト、ジョージ・ウィル(George F. Will)。彼がこれまで披露してきた選挙予測はことごとく外れているじゃないかと訴え、「評論家なんてまったく価値がない」と切り捨てる。ワシントン・ポスト紙で40年前からコラムを書き続け、ピューリッツァー賞を受けた言論界の大物への批判に支持者は大喜び。

話題はころころ変わる。パリのテロ事件、シリア移民への警戒感、凶悪犯罪、世論調査の結果の自慢、本当の失業率は25%との主張、オバマ批判。

もちろん看板政策、メキシコ国境沿いの壁の建設には力が入る。

「壁を造りますよ、とても大きく、美しい壁になります。いずれ皆さん、「ザ・トランプ・ウォール(トランプの壁)」と呼ぶようになるのではないのでしょうか。移民たちは合法的に来るようになります。それが私たちの望んでいることです。いま国内に不法に滞在している人たちは

〔国外に〕出て行かねばなりません〕

そのたびに支持者は立ち上がって声援を送る。掲げるプラカードに、こう書かれていた。

「サイレント・マジヨリティー(声なき多数派)はトランプを支持する」

サイレント・マジヨリティーが吐き出す不満

トランプの集会後、会場の外で支持者に話を聞くと、堰を切ったように不満を吐き出した。多くが、日々の暮らしに根差す不満だった。自らの体験に基づいているので真剣そのものだ。

元教師のマリリン・マックウィリアムス(59)がまず口にしたのは、「壁」への熱い支持だった。

「トランプは壁を建設してくれる。彼の主張がストレートなのが好き。(保守系)フォックスニュースでいつもトランプを見ているけど、見れば見るほど、彼のことが好きになるわ。こんなに大きな国の中で、彼がこの街に来てくれたことがうれしい。テキサスは不法移民問題が深刻なので選んでくれたと思う」

「街でスペイン語が当たり前になっていることが不気味。ここはアメリカなのよ」と憤りも口にした。食料品店に並ぶ商品のスペイン語表示が増えているだけでなく、時にスペイン語の

表示の方が英語より大きいことが気に入らない。

マリリン・クランプ(56)も取材に語った。

「彼はポリテイカル・コレクトネス(政治的な正しき)で批判されることを恐れていない。とても強い。経営者として常に判断を迫られてきた。そんな経験が豊富な指導者がこの国には必要なのよ」と語った。ここまではトランプへの前向きな評価と言える。

ところが、ここからは社会への不満一色になった。

「国境を守らないと国が崩壊するわよ。不法移民の流入を食い止めるべきよ。私たちは彼らにあまりにも多くの自由とお金を与えすぎた。福祉に依存するようになり、その重みでアメリカが増えたら、オシマイでしょ。彼らのフードスタンプ(政府が生活困窮者に発行する食料配給券)を支えているのは、私たち働いているアメリカ人。彼らは一時的な困窮から脱する方法としてではなくて、福祉に依存することをライフスタイルにしている、生涯それで暮らしていくつもり。それは許されない」

母マリリンの発言を聞いて、娘リディア・ブラウン(23)も思いを話してくれた。